

統語・意味論から見る韓国語の形容詞論再考 (A Revised Version of the Korean Adjective in Terms of Syntactical Semantics)

李 潤 玉

<はじめに>

韓国慶熙大学校国際教育院で2010年夏季語学研修を受けて帰国していた近畿大学1学年の韓国語・文化専攻生から「韓国語は形容詞が無い言語ですか?」という質問を受けた。そして同じ時期に動詞を使った例文と形容詞を使った例文を作るように、という筆者の指示に対して、形容詞という用語の代わりに「状態動詞」という用語を使ったレポートを提出した学生が現れた。学生たちが何故このような質問をし、そして何故「形容詞」という品詞名の代わりに「状態動詞」という表現を使ったのかについて尋ねてみた結果、学生たちが今まで形容詞として知っていた単語が夏季語学研修先の教材では「状態動詞」の名で使われていたことがその理由であることが判明した。

なお、このような出来事を契機に「何故、従来の形容詞を状態動詞と記述するのかに対する理由」を自分なりに理解しようと始めた作業の結果を纏め、2010年12月18日、2010 International Korean Language Symposium (於、北京外国語大学)で口頭発表を行った。その発表原稿に加筆・修正を加えたものがこの小論であることをお断りしておく。

1. 従来の諸言語の品詞分類

ここでは、本稿の問題点を際立たせるために韓国語に並行させて日本人学生たちに最も身近な他言語として日本語と英語の品詞分類を観察する。下記<表1>のような分類はあくまでも伝統的文法を基準とした品詞分類ではあるが、ここで採りあげる三つの言語だけではなく他の多くの(おそらく総ての)自然言語に形容詞という品詞は共通して存在すると思われる。にも拘らず、何故従来の「形容詞」という用語を「状態動詞」に代替する必要があるのかを調べることにする。

まず、下記の三言語に関する多くの文法書のうち、英語の‘adjective (形容詞)’

を *DELP* (1982:24) は次の(1)のように説明してある。

- (1) adjective : 名詞と形容詞が文法上類似した性質を有していることから、古くは両者の総称として noun が用いられ、区別する必要があるときは noun substantive (実名詞)、noun adjective (形容詞的名詞) と呼ばれていたが、現在はそれぞれ単に noun、adjective と呼ばれる。

この定義に従えば、動詞(例、가다 [gada] : 行く)と形容詞(例、짧다 [jjapda] : 短い)、そして体言の直後につく指定詞と呼ばれる「(이)다 [ida] ≡だ」の語尾活用が総て同一(例、친구다 [chinguda] : 友達だ)である韓国語も一つの品詞範疇に束ねることが可能ではないかと考えられる。しかし、現代学校文法における品詞の種類は<表1>のように分類されている。

	日本語	韓国語	英語
1	形容詞	형용사 (形容詞)	adjective
2	動詞	동사 (動詞)	verb
3	名詞	명사 (名詞)	noun
4	副詞	부사 (副詞)	adverb
5	感嘆詞	감탄사 (感嘆詞)	exclamative
6	助詞	조사 (助詞)	preposition
7	連体詞	관형사 (冠形詞)	conjunction
8	形容動詞	대명사 (代名詞)	pronoun
9	助動詞	수사 (数詞)	
19	接続詞		

<表1>

上記の品詞分類を一見するだけで、言語によって分類が全く異なることが明らかである。この品詞分類を大きな問題として取り上げた研究はアメリカ構造主義言語学に見られる。日本の英語教育にも採り込まれた、所謂「センテンス・パターン (sentence pattern)」がその最たるもので、その英語文型習得法と同時に C.C. Fries の名も日本に伝えられた。ここでその一端に触れるが、Fries (1952) が定めた3種類のテスト用の枠は次の(2)に示すように一般動詞と Copula (be 動詞) が前もって言語化されたものである。

(2) <テスト枠A> :

2					
(The)	<u> 3 </u>	<u> 1 </u>	is / was	<u> 3 </u>	<u> 4 </u>
-s are/were					

<テスト枠B> :

2					
(The)	<u> 1 </u>	remembered	(the)	<u> 1 </u>	<u> 4 </u>

<テスト枠C> :

2					
(The)	<u> 1 </u>	went	<u> 4 </u>		

要約すれば1は concert、 meal、 food 等が占める位置で、ここに生ずる語を一類語、2は be 動詞以外に seem、feel、see、come 等が占め、それらを二類語、3に来る large、necessary、new 等を三類語、4の there、generally、clearly 等を四類語と名付ける。これ以外に A 群から O 群に至る 15 個の機能語 (function word) を設ける。結果的には、何故このように複雑で数多い分類が必要か、と疑問がわく。今日では殆ど取り上げられないことがない事実が Fries のこの品詞分類の評価を物語っているようである⁽¹⁾。品詞分類の先行研究の一つとして取り上げたが、この方法論では<テスト文 A>で Copula (即ち、be 動詞) が最初から与えられているため、本稿の論旨に適応しないことから、Fries 流の考え方にはこれ以上触れない。同じアメリカ構造主義文法でも A.A. Hill となれば少し話は違ってくる。伝統文法による品詞分類との繋がりが見られることもあり、その品詞分類が一体どのようなものであったかを見てみる価値はあると筆者は判断するので、ここで少し立ち止まって Hill の考えを紹介する。A.A. Hill (1958:230) が主張した「最大限の修飾語を持つ名詞句」の位置類 (positional class) を基盤とした<表 2>の名詞句で形容詞の定義が伝統文法家によって異なってくる (勿論、Hill は「類」を使い、伝統文法の品詞名を用いない)。

VI類	V類	IV類	III類	II類	I類	
all	the	ten	fine	old	stone	houses

<表 2 >

I類からVI類までをすべて形容詞としてみなす：(H.Sweet, G.O.Curme, C.T.Onions)

II、III、Vのみを形容詞としてみなす：(O.Jespersen)

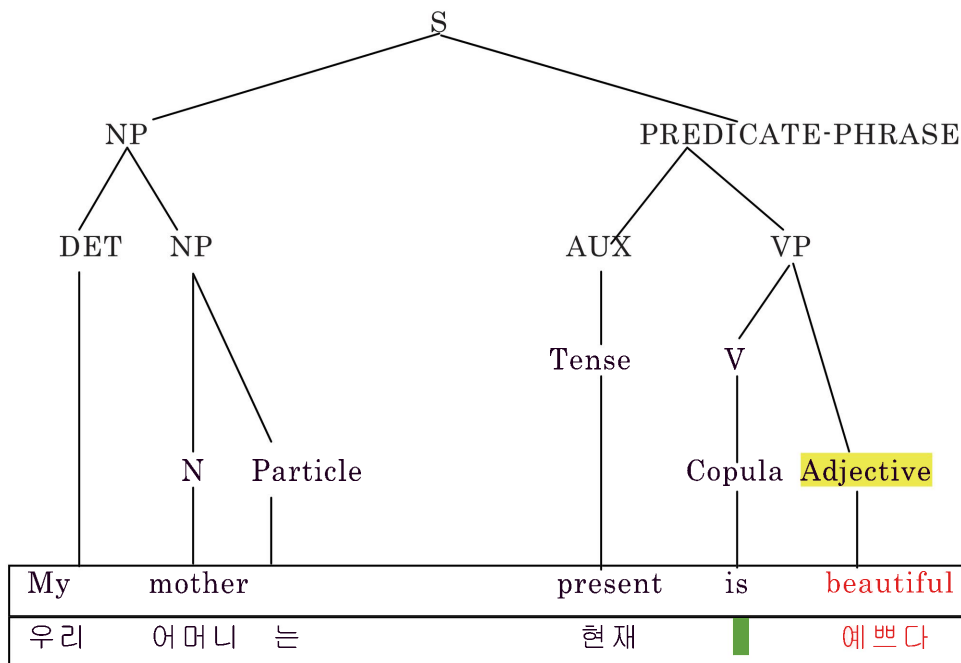
II、IIIのみを形容詞としてみなす：(H.Poutsma, E.Kuruisinga, R.W.Zandvoort)

このように、形容詞の分類一つにしても学者により見解が異なる。⁽²⁾この見解の差は「意味」を基準としているのか、「機能（または分布）」を基準としているのか、または「両者を混合させた立場」を基準としているのかによる表れである。このように「形容詞とは何か」に対して一言で定義するのは難しいが、「変形生成文法 (Transformational Generative Grammar)」ではこのような問題は起こらない。その理由は、この Chomsky 文法では ADJECTIVE の node (節点) の下に現れるすべての語彙項目 (lexical item) はすべて形容詞になるからである。さらに言えば、生成文法では分析手順・分類基準を研究の中心に置くということが無い点に特徴がある。統合論と同様、語の分析・分類は言語能力 (linguistic competence) の探求を可能にするような方法で行われればよい。従って、英語の品詞に何と何があるかは、いわば、母語話者の了解事項であって、その場その場で適宜、記述に必要な品詞を登場させるという方法論をとる。この種の考え方は、極めて有効な言語記述かもしれない。自ら言葉で定義を行わず、母語話者の直観力に定義を委ねる Chomsky 流方法論は賢明と言える証拠がある。例えば、「文 (sentence)」とは何か、の定義は昔から議論されてきたものの、決定的な説が現れなかったが、Chomsky は句構造規則 (Phrase-structure rule) の一つとして、'S ⇒ NP VP' の形式で「文 (S(entence))」を統合構造の書き替え規則で表示した。柔軟な考え方で、アメリカ構造主義者達が定義や言語記述に完璧を求め過ぎた事が皮肉にも自らの首をしめる結果となった事実とは対照的である。論を伝統文法に戻す。Jespersen (1963⁹: 74-75) は「名詞 (substantive)」と形容詞 (adjective)」との形式上の相違 (formal distinction) は分布 (distribution) から明白であると述べ、前者の実例に *stone, tree, knife, woman* を挙げ、後者の実例に *big, old,*

bright, grey を挙げ、両者を対照させている。論旨は名詞の「具象性 (concrete)」と「抽象性 (abstract)」に及び (Jespersen 1963⁹: 133-139)、両者は「異なったレベル (on a different plane)」にあるとし、前者の実例 ‘a hard stone’ と後者の実例 ‘hard work’ から、「具象的 (concrete)」とは ‘what is found in the exterior world as something palpable, space-filling, perceptible to the senses’ (人間の五感で認識される物理的外界物)、「抽象的 (abstract)」を ‘something only found in mind’ (人間の心中にのみ存在するもの) と定義するなど、後の認知科学 (cognitive science) に相通ずる考え方が見出される。とはいえ、‘usage (用法)’ と ‘distinction (相違)’ とを相互交換的に使用し、少し sloppy な感は免れないが、さらに、このような「定義」行為の難しさを教えてくれるのが同著者の *MEG* で、‘stone bridge’ の ‘stone’ を巻によって ‘substantive’、‘adjective’ と異分析していることである。この矛盾表記は、品詞判定方法の一つに統語論の「分布 (distribution)」を挙げながら「意味論 (semantic)」が混入し、アメリカ構造主義 (American structural Linguistics) のように、徹底した意味排除の「分布」のように撤しきれなかったことがその原因であろうが、筆者はアメリカ構造主義が唯一正しい品詞分類を行ったと示唆しているわけではなく、品詞分類は非常に困難な作業であることを主張している。

この件はさて置き、Chomsky 理論はすべての自然言語に共通して存在すると考えられる普遍性 (universality) を明示しようとした文法理論であることから、当然のこととして韓国語にも適用可能と考えられる。例えば、次の(2)の英語文の句構造 (Phrase structure) をわかりやすい形で示すと、<表3>のような樹表図 (tree diagram) になる：

(2) My mother is beautiful.



<表 3 >

この<表 3>は Chomsky (1965) を参考に行っているが、(2) の文の深層構造 (Deep Structure) は簡略化してある。この図表から、英語では「Copula + Adjective = stative verb (状態動詞)」であること、及び韓国語には英語の be 動詞に相当する Copula が存在しない事実が表されていることが分かる。なお、時制 (tense) に関しては後述する。

2. 従来の「形容詞」を「状態動詞」で表記する説

韓国語の形容詞は<表 4>が表すように用言の一つとして動詞と同じように主語に対する叙述機能を持つとされる。即ち、構文論的機能が動詞と同じ、ということである。勿論、いくつかの統語論的 (syntactic) な違い (形容詞は命令形語尾と勧誘形語尾を取ることが出来ない点など) もあるが、両者に共通点が多いことを根拠にして形容詞を動詞に包含させて、その下位分類で状態動詞と動作動詞に分ける方法も可能ではないかと考えられる。そして、英語圏の母語話者の初期韓国語学習

者のための教材において、形容詞という用語の代わりに状態動詞という用語を使うことにはそれなりの理由があったのだろうと推測する。その理由とは、韓国語の形容詞は、叙述的に用いる場合には、(状態)動詞と同じ分布を示し、かつ、(状態)動詞と同じ意味論的働きをするので、従来の形容詞を(状態)動詞と表記すれば、英語圏の母語話者の初期韓国語学習者が母語の影響によって Copula をどこかに表そうとする誤謬を犯すことを事前に防ぐことが出来る実践的代案のひとつとして有効ではないかと、ということである。

Sentence ⇒ Subject	+	Predicate
↓		↓
体言 (+ 助詞)		用言
{ 물이 (≒水が)		흐른다. (≒流れる)
{ The water		flows.
{ 어머니는 (≒母は)		예쁘다. (≒きれい)
{ My mother		is beautiful.

<表4>

韓国語と英語だけを比較してみても形容詞は統語的機能と意味の上で大きな差が現れる。これは、二つの言語体系が異なるからであるが、韓国語の形容詞は<表4>が示すように、動詞と同様に単独で述部 (Predicate) を構成し得る統語機能を持つのに対し、英語の形容詞は述部の構成要素の一つとして生じうる叙述的な用法に加えて、同形のままで名詞の直前に (例、a big box : 大きな箱)、もしくは名詞の直後 (例、a baby asleep : 眠っている赤ん坊) に現れて名詞を修飾する限定用法も兼ね備えている。しかし、韓国語では、叙述用法と限定用法とでは形容詞は互いに違った語尾変化を伴って現れねばならない。「形容詞 (형용사)」と言っても、英語と韓国語ではこれだけの違いがある。重要点を重ねて挙げると、形容詞の叙述用法では、韓国語は単独で現れて述部を形成しうるが、英語では Copula を同伴しなければ述部は生まれえないということである。

3. 提案（その1）

自然言語では時制（tense）は現在時制と過去時制に分けられ、動詞に対する時間関係を表す範疇（category）に属する、と定義される。ここで重要な点は、時制範疇がない自然言語も存在する事実で、以下(1)にインドネシア語をその具体例として挙げる。

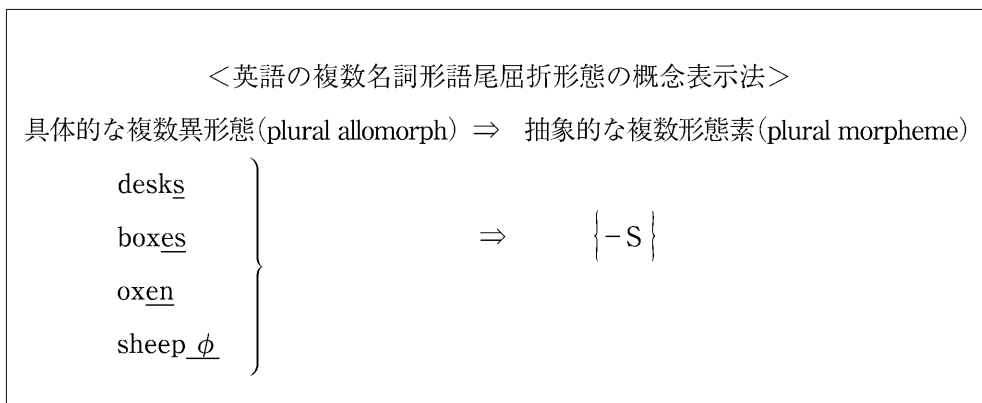
(1) a. Bunga merah. ((その) 花は赤い)

(Flower(s) red)

b. Bunga *tadinya* merah. ((その) 花は少し前までは赤かった)

(Flower(s) *a little ago* red)

時制範疇がないと言われるインドネシア語で「現在」を表す時には「現在を表す副詞」を、「過去」を表す時には「過去を表す副詞」を使って文の時制を表す。このような時制の表示方法は M.J. Gallagher (1970:220-225) と同じ観点から見る事が出来、「時を表す副詞」と AUX 内の「時制」表示は現れる位置が単に異なるだけであるという解釈も成り立つ⁽³⁾。上記 (1a) のインドネシア語は<表 3>の韓国語(어머니는 예쁘다 (≒母はきれい))と同じように英語の Copula (be 動詞) が存在しない言語である。しかし、(1a) と<表 3>の韓国語両方とも「現在」を表していることは事実である。ここで問題になるのは、この「現在時制」が文中のどこに、どのような形で現れるかである。結論から言えば、AUX 内の Tense 「present / 現在」が「時制の ϕ 異形態素 (tense zero allomorph)」として「예쁘다 (≒きれい)」に添加されていると見做すという考え方である。この論理の理解の一助として、アメリカ構造言語学の名詞の複数概念表示法⁽⁴⁾を例に挙げて<表 5>として提示する。



＜表5＞

ここで注目する点は、単数形と複数形が同じであると言われる sheep の単数形が辞書項目語（基本形）と同じではあっても、複数形には複数の形態素 $\{-S\}$ が ϕ / 異形態素として現れていると考えることである。即ち、 ϕ は「何も無い」ではなく「ゼロが存在する」と解釈して英語の（可算）単数名詞形が複数形に変化するときには、「例外なく総ての（可算）名詞が語尾屈折する」という論理を立てるわけである。このような論理を時制範疇にも適用させ、不規則変化動詞の過去異形態（例、ran、drove、took、cut 等）を規則変化動詞の語尾屈折形態素 -ED に収斂させる考え方と同じく、具体的には (1a) の形容詞「merah（赤い）」と＜表3＞の形容詞「예쁘다（≒きれい）」に適用させれば、時を示す副詞から「時制」をもらい「 ϕ 時制」が添加されて、本来の動詞のように「時制」を持つ品詞として機能するということになる。しかし、単語自体には何の屈折（inflexion）も起らないので辞典項目語（基本形）と同じ形態のままである。実際に英語の動詞も現在形の場合、主語が三人称単数以外の場合には「I run / You run / We run / They run」のように「 ϕ 時制」が添加されていると見做すことが出来るし、また、AUX 内の PAST は屈折（inflexion）を起こして「예뻤다（≒きれかった）」に変化することが形態的に現れる。

要約して言えば、「PRESENT（= ϕ 時制）」と「PAST」を統語的表示マーカー（syntactic marker）として見做すことである。このような観点の萌芽は Aronoff（1976）にも見ることが出来ることと、このような観点は、また、従来韓国語の「形容詞は、実は状態動詞である」という主張に規則（rule）的裏付けを与えるこ

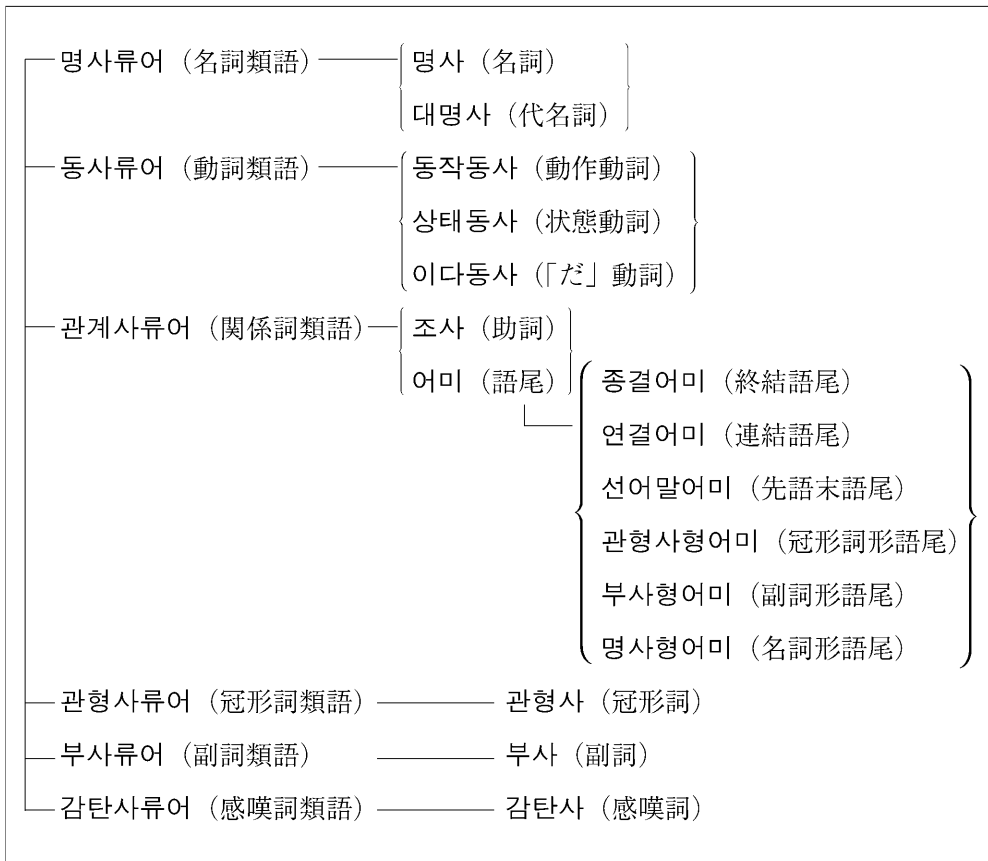
とが可能になり、論理的な韓国語教授法にも繋がるのではないかと考えられる。

4. 提案（その2）

<表6>の新しい品詞分類表（백봉자（2004:204））は従来の韓国語の形容詞を状態動詞と表記するための結果として生まれたものなのか、それとも、それとは無関係に伝統文法から脱皮して韓国語の品詞類を規則正しく立て直すための結果なのかは筆者には正直に言って不明である。が、従来の品詞分類に慣れている日本語母語話者の初期韓国語学習者にとっては理解に時間が必要と考えられる。その際、彼らの理解の助けとして新しい品詞表に対する論理的説明と解説が不可欠となる。少なくとも日本語を母語とする初期韓国語学習者には「従来の形容詞」を何故「状態動詞」と表記しているのかについて、説明及び、その論理的理由を明示する必要性があることを提案し、その根拠を以下に記す。

- ①そもそも、品詞分類の主目的は文法記述を簡明化することにある。新分類は状態動詞構文以外の文法記述の簡明化に繋がっているのか。
- ② Copula（特に、be 動詞相当語）を持たない言語（日本語、中国語、インドネシア語等）の母語話者に「限定的／連体的用法（attributive use）」の「かわいい赤ちゃん」の下線に生ずる、従来の「形容詞」にいかなる品詞名を与えるのか。
- ③日本語に限ると、形容詞は活用のある自立語で、文中において単独で述部を形成することが出来、言い切りの形が口語では「い」、文語では「し」で終る。「高い・高し」「うれしい・うれし」の類で、事物の性質・状態などを表わし、動詞・形容動詞とともに用言に属する。このような意味・用法がパラダイム（paradigm）関係と新分類の「상태동사（状態動詞）」と新分類品詞表（<表6>）とはどのような接点をもつのか。

このような諸問題については、「形容詞は状態動詞である」という考えにはそれなりの説得力がある故、早急な論理的説明・解説が急がれるのではないかと筆者は考える。



<表 6> (日本語訳筆者)

<注>

(1) このように語が生ずる位置を「分布 (distribution)」と呼び、「意味」を排除した機械的なこの「物理主義 (physicalism)」こそが言語の構造を正しく分析する方法と考えたアメリカ構造主義言語学者達 (特に、「新ブルームフィールド学派 (neo-Bloomfieldian school)」) は音の分野では言語学の発展に大きく寄与した。その一つが「音素 (phoneme)」の発見である。「音素」は抽象的存在音を意味し、空気の振動により波長を生む物理的な音を「異音 (allophone)」に対応する。

上出した構造主義学派の「分布」という考えは、一見、意味を排除した客観的手法に思われるが、真実は違う。英語の母語話者はセンテンス・パターンの空白部にでたらめに語

を入れて誤った分布を生み出すことはない。その理由は母語話者が潜在的に持っている「言語能力 (linguistic competence)」が正しく機能しているからである。つまり、センテンス・パターンによる語の「分類 (class)」方法も Chomsky の言う母語話者の言語能力依存流の品詞選別法も、結局は同じことである。正しい分布を生む語の選別には、必ず「意味」も伴うと考えねばならない。理由は、正しい語の選別が、単に言語能力が分類力を働かせて語という容器のみを取り出させるが、中身 (= 意味) のない容器という語の選別のことを指すとは到底考えられないからである。Chomsky (1957) が非文の例として示し、一躍有名になった ‘Colorless green ideas sleep furiously.’ (*無色の緑色のアイデアが猛烈に眠る) を引用するだけで筆者の主張は十分だろう。仮に、この文を ‘Colorless (1) ideas (2) furiously.’ のようにセンテンス・パターン文として使った場合、(1)に ‘green’、(2)に ‘sleep’ を英語母語話者は絶対に入れないことは確実で、その理由は「分布が示す意味関係 (= 選択制限 (selection restriction))」を (無意識的意識の中で) 認識しているからである。

- (2) アメリカ構造主義者達の語の「類 (class)」化の結果として、名詞、形容詞などの品詞名称を使わないだけで、「語類 (class) 1」、「語類 (class) 2」などの類別結果は日本の学校文法 (つまり、伝統文法) とほぼ同じであることを綿密な調査と分析で明らかにした荒木 (1966) の労作がある。
- (3) ただし、発話時を中心に過去、未来に不定に伸びる時間帯を表す「虚偽時制 (false tense: R. Lakoff (1970))」と「時を表す副詞」との関係は考えにくい。この特殊現象については本稿では扱わないが、その処理方法については Ueno (1982)、上野 (1983) に詳しい。
- (4) ここでアメリカ構造言語学が何故「意味」を排除し、「分布」こそが客観的言語観察としたかについて、その歴史を少し述べておく。ヨーロッパで研究活動を行っていた「プラグ音韻学派 (Prague phonological school)」の一人 R. Jakobson は 1942 年米国に渡り、後継者 M. Halle などがハーバード (Harvard) に研究拠点を置き、何の予備資料・知識もなくアメリカ先住民の言語研究を始めたが、唯一の手掛かりは先住民の発話が生む空気の振動の連鎖、即ち「音声」であった。このような理由で、彼らの手法は「物理主義 (physicalism)」、「意味という抽象物を排除した客観的手法」と呼ばれるようになった。

<参考文献>

1. 백봉자 (2004) 『외국어로서의 한국어 문법 사전』 연세대학교 출판부 : 서울 .
2. 서정수 (1993) 『국어 문법의 연구』 한국문화사 : 서울 .
3. — (1996) 『현대 국어 문법론』 한양대학교 출판원 : 서울 .
4. 이영택 (2003) 『학교 문법의 이해』 형설출판사 : 서울 .
5. 이익섭 · 임홍빈 (1998) 『국어 문법론』 학연사 : 서울 .
6. 荒木一雄 (1966) 『英文法 —理論と実践—』 研究社 : 東京 .
7. 上野義和 (1983) 「英語の総称文とその時制」 『大阪外国語大学学报』 62.
8. Aronoff, M. (1976) *Word Formation in Generative Grammar*. Linguistic Inquiry. Monograph1. MIT: Cambridge.
9. Chomsky, N. (1957) *Syntactic Structures*. The Hague: Mouton.
10. — (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*. MIT Press: Cambridge.
11. Fries, C.C. (1957) *The Structure of English: An Introduction to the Construction of English Sentences*. Longman: London.
12. Gallagher, M. J. (1970) “Adverbs of time and tense”, *CLS* 6, pp. 220-225.
13. Hill, A.A. (1958) *Introduction to Linguistic Structures : From Sound to Sentence in English*. New York: Harcourt, Brace & World.
14. Lakoff, R. (1970) “Tense and Its Relation to Participants,” *Language* 46, pp.838-849.
15. Ohtsuka, T.& F. Nakajima (eds.-in -chief) (1982) *The Kenkyusha Dictionary of English Linguistics and Philology (=DELP)*. Tokyo: Kenkyusha Co., Ltd.
16. Jespersen, O. (1963⁹) *The Philosophy of Grammar*. George Allen & Unwin: London.
17. — (1909-49) *A Mordern English Grammar on Historical Principles*. 7 vols. Allen & Unwin: London. (=MEG).
18. Ueno, Y. (1982) “On the Generic in English,” *Journal of Osaka University of Foreign Studies* 56. (Linguistics).